
なんでこんなことになった？

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでこんなことになった？

【Nコード】

N2639Y

【作者名】

ケン

【あらすじ】

平凡な学生はなぜか大人気ゲームの女主角の姿に変身

これから待ち受けていることに立ち向かうお話です

第一話 「ゲームと体の異変」 (前書き)

更新は、遅いです

イラストは載せれたら載せます

第一話 「ゲームと体の異変」

いつも通りの生活をしている青年は、さだきよへい狭田恭平17歳

普通の高校に通うクールな青年だ

いつも通り学校に行き帰り、アニメを見てゲームをするといった

だらけた生活をしている彼の身にある日突然……

「ああー今日も疲れたな おっともつこんな時間ゲームでもしてか
ら寝るか」

「おい遅かったな、先にプレイしてるぞ」

「主人公が遅れてどうするのよ」笑

そう言っているのは彼の親友の原田理欧と

幼馴染の蓬田悠里だ

彼が今やり始めたゲームは、某ゲーム会社が発売した大人気RPGの

Those who travel in the time
この時を旅する者たち

というゲームだ

このゲームは3Dグラフィックを使用した最新のゲームで

主人公が珍しく女性と決まっていることである

ほかにもサブキャラ視点プレイというものがあり、主人公じゃないサブキャラでプレイする事もできる。

ゲーム主人公

神木シルディア香菜

愛称 香菜、シルディア、シャル

身長168cm

プレイヤー 狭田恭平

サブキャラ

白上聡史

愛称 聡史

身長 175cm

プレイヤー 原田理欧

アリサ・フェルトン

愛称 アリサ、リサ

身長 160cm

プレイヤー 蓬田悠里

最新のグラフィックにより髪の毛の1本1本や影、顔の表情、動作、周りの木々

建物、その他の動物や乗り物などの動きなどがすごくリアルである
主人公は自分の好きなパーツなどでオリジナルで作ることが出来る
のである

サブキャラは大体の容赦が決まっていてイケメンやスタイル抜群ばかりだな

種類によっては、筋肉や脂肪の量が違う

ただ他のゲームと違う所は、いきなり冒険ではなく

この世に生を受けたところからはじまるのだ

旅に出る時期などは、自由に換えれるし仲間も自由に選べる

成長速度は、人によってまちまちで、上がる人は上がるし、上がらない人は上がらない

といった少し変わったRPGである。

主人公が女性なため、幼馴染がやればいいじゃんと言ったのに

あんたはゲームが一番得意だからあんたが主人公でいいよね

じゃあ理欧がやればいいじゃん

いやだね俺は付き人きやらでいいよ

とか言っつて結局俺が主人公に・・・

「やっと俺らの年齢まで来たか・・・」

「長かったね」

「はじめて始めた時から一年半くらいたったからね」

「えっ！もうそんなにたつのか？」

「うんそーだけど、しらなつたのか？」

マジでそんなにたっていた

発売されたのが去年の4月・・・今は9月だから約1年半だ

長かったこの年まで育成するのが

その夜、俺は夢を見た・・・ここまでの主人公視点での成長を

そして翌日、俺の体に異変が起きていた（汗）

「な、な、なんで女になってるのおお~~~~~???」

そこには付いているはずのない胸がしかも巨乳、したのも消えている

とりあえず落ち着くぞ

「まずは鏡をしてみるぞ、ブスカ美人が出来れば美人がいいなあ」

「って、くそ美人じゃんでもどっかで見た事があるんだよなあ・・・

てか思い出したなんでシルディアになってるの??」

どうしようどうしよう

授業もあるし、ましてや人気ゲームの主人公になっちゃったなんて

信じてもらえないよな

まずは、幼馴染と親友に電話だ

「もしもし」

「もしもし、誰？」

「悠里か？ 俺だ恭平だよ」

「ハア〜？ 本当に恭平なの？ その声どうしたの？」

「とりあえずうちに来てくれ、事情は話す・・・出来たら理欧にも伝えてくれないか」

「うん、わかった それじゃあね」

はあ？ まずは着替えるか

でもどうしようブラとかないし、しょうがないから

そのまま着ようかな

胸の部分がきつすぎる スボンもなんかきついし

我慢するか

ピンポーン

「来たよ〜きょ〜へい あ〜け〜て〜」

「まって今あける」

ガチャ

「……………も、もしかして、きよ、恭平？」ポ

カーン

「うん そつですよ 俺です」

「なんで女!?!」

「俺もわかんないんだよ

とりあえず上がって」

「ううー」「ジューー

「な、なに!?!」「ポヨン

「な、なんで私よりもおっぱいが大きいのよ（怒）」

「じっ、しらないよ」

「ううーもつつ頭に來たからあなたのそのでかい乳、特別に揉みしだいてあげるわ」ニター

モミモミ

「ち、ちめ・・・あんっ!?!」

「ほれほれ」モミモミクリクリ

モミモミ

「あ、グスッ・・・もうやめ・・・てよ」

「あ、ご、ごめん・・・じょ冗談だつて・・・ね」オロオロ

「ヒック、う、うんわかった。幼なじみだから特別に許してあげる」

「ほんとう！？あ、ありがとう！！」

「もういいか？」

朝から俺には刺激が強過ぎる」

「あっ！！う、うん　　いいよ」

「それにしても、どこかで見た気がするなあっ！！」

「ああ　　うんうん　　そーだそうだよ　　うんうん」

「なあ恭平なんか悠里が自分の世界に入ってるんっすけど」

「気にすんないつもの事だから」

「その姿はあんたのゲームキャラだっ!」

「そんなの一目見たときから知っていますけど・・・」

「.....」

「わ、わたしだってわかってたわよ
それにしてもこれからどうすんの?」

「そう!..それなんだよ・・・ほんとうにどうしよう」

「突然の女体化なんて信じられるわけないし」

「うん、だから困ってるの・・・学校とか」

「うっっんそうだな」

「うっっんそうだな」

「こづいづのはどーかしら、恭平は家庭の事情で転校することになった」

親に事情を話し養子または、戸籍を女に変える

新しく転校してきたということにして、学校に戻るとか」

「うーん・・・」

そうするしかないかもね、2人ともありがとう　でも今日は休む
ね学校

その間に親と話をつけておく」

その後、親に電話を誰だお前といろいろ疑われたので

家族しか100%知らない秘密を話しどーにか納得してもらった

あすは家に帰ることになった

第二話 「平穩な生活はないわけで」 (前書き)

ということで軽く人物紹介

狭田恭平さだ きょうへい

高校2年生 17歳

身長 178cm

クールでかつこいい

クラスの女子たちからも人気があり、実は幼馴染も彼のことが好きであるが
鈍感で意外と恥ずかしがり屋なため幼馴染と両思いだが告白できないでいる

狭田香菜さだ かな

高校2年生

身長 168cm

かなりの美人

このキャラはもちろん恭平の女体化後のキャラだ

元はゲームの主人公で、特に男性から絶大な人気を誇っている

あいだ ゆうり
蓬田悠里

高校2年生

身長 155cm

美人というよりかわいい系

恭平とは、幼馴染で大の親友、実は今日への一番のよき理解者である
恭平へ淡い恋心を抱いているが鈍感なのかきずかない!?

はらだ りあう
原田理欧

高校2年生

身長 172cm

かなり普通の学生、恭平とは中学で意気投合
そこから大の親友である

とこんな感じです

第二話 「平穏な生活はないわけで」

さて幼馴染や親友に言われた通り次の日は家庭の事情

ということ、学校を休み実家にこれから帰省をするところなのだが
服や下着は、幼馴染に買ってきてもらった服を着るのだが……

「なあんだあこれ……????」

なんとそこには、いまどきの女の子が着る胸元の大きくあいた服と

軽く上に羽織るための、カーディガンそして

フリフリのミニスカートに極めつけは、ニーハイソックス

マジでこれを着るのか、いくら心まで女っぽくなったといえ

元は男だし、ここまで短いスカートは自分が女だったとしても
たぶん履かなかったと思う

そんな事を思っただけでもはじまらないか

早く着替えていこうと

ガチャ

「ふうー、それにしても幼馴染はなんでこんな格好をさせたんだ？」

「まつ、いいか」

はあそういえば、駅まで遠いんだよな

20分普段ならそんなにも気にならないが今日は違う

なぜなら女になってしまい恰好は

ミニスカにニーハイ、胸を強調する大きく開いた服にカーディガン

周りの視線がイタイ

何にもなく駅まで着きますように???

だがその願いはかなえられない

「ねえキミ、かわいいねよかったらその喫茶店でお茶しない？」

ゲツ ナンパかよ

「すみません・・・この後用事があったって急いでいるので、ごめんなさい」

タタッ ガシッ

「ひあっ？」

「ねっ？ ほんの少し10分だけでいいから」

なんとナンパ男たちは、先を急ごうとする俺の腕を
掴んできたのだ

「ほんとに急いでるんです？ 放してくださいっ（怒）」

「しょうがないな、じゃあメアドくらい教えてくれたら考えてあげるよ」「ニヤッ

きもちわりー早く逃げていきたいよ（泣）

ナンパされる女の気持ちがわかったよ

「あのそんな気はさらさらないんで さよならっ」 バアッ
タッタッタ

「あっ？ 待ってよ〜」

「ハアーハアー なんとか ハッ 逃げ切った」

ああーあ 本当にめんどくさかった

あんなことがこれからも起きたらたまんねえーよ

そんなことを考えて木陰のベンチに座って居ると

またしてしても違う男が声をかけてきた

「おおっ キミ美人だね」 スタイルもいいし 俺の彼女になら・・・
「・・・」

「おとわりですっ????」 「ダッシュ」

もういい加減疲れたわ

もう勘弁、んっ？ なんかまた人が来た今度は違う感じだ

「キミ少しだけここでいいからお話聞いてくれないかな？」

まあ話だけならいいか

「実は私いろいろものごとで」

えっ ファントムプロダクション!?

これ一流の芸能事務所じゃん

「実は、君をモデルとしてスカウトしたいんだ」

えっ!?! 今何て

「キミは、顔立ちも綺麗だしスタイルもいいし絶対にモデルに向いているんだよ」

「あの、ちょっといいですか？」

「じゅうん、あっはい……いいですよ」

「今は。急いでいるので保留にしていただけないでしょうか？」

「ううーん仕方ありませんね……いいですよ」

そのかわり後でこの番号に電話してくださいね」

「それじゃあ失礼します」

「電話のほうよろしくね」

「ハァーどうしよう・・・家に帰ったら悠里にでも相談するか」

「やっとのことで駅に着いた恭平は、時計を見て驚く」

いつもの3倍以上時間がかかってるじゃん

そして実家まで帰るために、電車に乗っている

いろんなところから視線やヒソヒソ話がきこえる

「ねえあの子可愛くない？」

「綺麗な子だね」

「なんかどっかで見たことない？」

「あっ ゲームで見たことない？」

「ほらほらオンライン対戦で戦ったときにさあ」

などなど……もちろんガン無視&気にしない

こんなこといちいち気にしていたらきりがないのだ

でも一つだけ驚いたことは、偶然にもオンライン対戦した人が身近にいたことだ

そして実家前

ピンポン

「はい、どさばらみまどじょうが」

「あのかあさん　　恭平だけどあけてくれない？」

「えっ 恭平 うんわかった」

ガチャ

「ただいまかあさん」

「ほんとに恭平なの、悠里ちゃんや理欧くんにも聞いていたけど
こんな美人になっているとわきいて居ないわ？」

なんでうちのかあさんは、テンションが上がってるの

ねえ みんななんで？

「まあ、いいわ 上がってちょーだい」

「さっ」

第二話 「平穏な生活はないわけで」(後書き)

作者 「親が寝たすきにやっと投稿できました」

恭平 「こんなことやっけていいのかよ、次赤点だったら留年でしょ(笑)」

作者 「……………」

悠里 「ちよつと恭平作者であるケンさんをいじめないの」

理欧 「でも恭平は事実しか述べてないよね」

悠里 「ちよつと二人ともそういうことは言わないの

「ごめんなさいね、変わりに私が謝るのでッてダイジョウブですか？」

作者 「……………」ガーン 激落ち込み

恭平 「まあこんな奴はほおっておこうぜ？」

悠里 「そんなこと言わないの！では次回予告は、ついに親との話し合いをして

学園デビューによる大波乱かな(笑)」

恭平 「もう 勘弁してくれよ……………」

第三話 「実家と家族と話し合い」 前編（前書き）

テスト期間に突入です

後編の更新は、テスト後かも

第三話 「実家と家族と話し合い」 前編

久しぶりの家だやっぱり落ち着くな

「そーいえば有希と涼輔は、って今は学校の時間だったね

「そーよ あなたは欠席してまで帰省してるんだからね（笑）」

「あははっ……っとその前に聞きたいことが」

「なにかしら？」

「このことは、家族全員知ってるってことでいいんだよね！」

「うんそうだけど・・・いつ帰ってくるかは、みんなには内緒にしといたわｗｗｗｗ」

「ｗｗｗｗｗｗじゃねえよ、ちゃんと伝えとけよ？」

「コラっ??」

女の子がそんな言葉遣いをしないの(怒)「

「ヒッ……ハ、はい「めんなさい」

「一応みんなには話してあるし、お父さんの納得してくれているから

後は、顔合わせだけだから今日1日で終わるわ

だからそれまで好きにしていなさい……あなたの部屋もそのまま
だから「

「わかった。

部屋にいるね」

「わかったわ。

何か聞きたいことがあったら呼んでね

何もなければ、ご飯が出来たら呼ぶわね」

そういえば、こんな名刺をもらったんだっ

今はうちの学校は、少し大きな休憩の時間だったと思うから

悠里に電話でもしてみるか……

プ、プ、プ……プルルルル……プルルル

「…のたごじい…さじ」

「もしもし恭平だけど…」

「もしもし？」

「いやー実はさ、今日実家に帰るときにフアントムプロの人に会ってさ」

「えっマジで!？」

「なんでなんで?」

「うん、それでモデルをやらなかったってスカウトされたんだけど・・・」

「・・・って、細い細いからか、おなごからか、おまもりか、それか」

「ええ-----??.?」

「・・・」

「それは、恭平の親に言ったの？」

「いや、ただただけど……まずは幼馴染の悠里に聞いたほうが
いかなって思ったから」

「それは嬉しいことね。 私ならやっちゃんなよだけど

恭平の親にも聞いてみないとね」

「うん、 わかったきいてみるよ・・・うんじゃーね」

ガチャ

「ねえ かあさん」

「あら、どつしたの恭平？」

「いや実はね……………コミュニケーション）モデルの権について」

「ええっ！・・・でもしょうがないかな、今の姿ならだれもが嫉妬する

くらいの美貌とプロポーションだものね」ルンルン

「ねえなんでそんなにノリノリなの（苦笑）」

「だって面白そうじゃないモデルとか、やっちゃんなのよ」

「軽い感じだな、戸籍を女に変えたら考えるよ」

「あら、検討してくれるのやったー??」

でも、戸籍の性別変更は難しいのよ・・・裁判所や医者なんかがあるって」

「でも、こんな姿で戸籍が男じゃ困るよ」

「まあ、まずは一ヶ月は休みなさい」

「ええ~~~~~」
「一ヶ月?????」

第四話 「実家と家族と話し合い」 後編

ということでした。ただいま母は、学校へ電話中

これから一か月俺はどつしよう

遊び三昧？・・・いやいやその間にも学校は、進んでいる

悠里にでも勉強を教えてもらうか・・・でもいちいち通ってもらうのは悪いし

俺から通うか・・・まアしょうがないな、ナンパは我慢だ

「ただいまー？」

おっこの声は有希かな・・・

「おかえり有希」

「えっ、ど、どちさま様ですか？」

「グサッ・・・ウツ・・・今のは心に響くぞ妹よ・・・」

いきなりどちらさまなんて……

お兄ちゃん泣いちゃうぞ(笑)

「妹よって……だれ? ……恭平にいは男だし……」

「そのことについては、私から説明してあげる」「フフッ

なんなんだよ最後のフフッて……」

「実は恭平は………性転換手術をしましたー……」

「ええー—————」 「ちげえー—————」 「

「フフツ
W
W
W
W
W
W
W
」 母、爆笑中

「恭平にいの心が女の子だったなんて知らなかった」 ニヤッ

「性転換じゃなくて、朝起きてたらこうなっただけなんだからな
そして最後の不敵な笑みはなんだ？」

「お兄ちゃん超人でかわいいし、実は私女の子もアリだったりし
て」じゅるり

なんかあやしい感じに、というかなぜ妹よここまで寄ってくる
まさか俺、襲われるのか？・・・いやだ怖い怖い・・・ヤメテ

「・・・・・・・・かわいい・・・・・・・・ニヤッ・・・・・・・・食べちゃおうかな」「ニ」「ニ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」ガクブルガクブル

あ、足が動かないどうして・・・・・・・・怖いヤメテ

「こんなに怯えちゃって・・・かわいいなあ～～～～」

「もうやめて・・・グスツ・・・何かしたなら謝るから・・・」

ヒック・・・うう・・・本当に怖い・・・」ガタガタ

「やだなあ～大好きなのにこんなに可愛い子になって

私が襲わないと思う？・・・ホラ泣かないのかわいい顔が台無し」
又ギッ

そういえば妹は軽く百合の方向性があるんだった（泣）

本当に怖い・・・これが襲われる女の子の気持ちなんだろうか？

誰か助けてえ

しかも下着姿になってるし・・・

てかその前にうちの家族おかしなやつばっかじゃん

「ハアハア、おねえちゃんカワイイよ」ハアハア

えっ今なんと・・・おねえちゃん？

やばい妹の理性が完全に百合に入ってる

お母さんに助けを・・・・・・って

なんでそこで見てるの~~~~~
(泣)

「ニヤニヤ・・・そろそろ助けてあげようかね」
母

ガシッ

「ホラ恭平！　今のうちに部屋にでも逃げな

あんたの、処女が妹の手で奪われないためにもね（笑）」

「あ、ありがとうかあさん」

「はなしなさいよ~~~~~」
「バタバタ

早く逃げよう

あつ、あれ？・・・足がうまく動かない

「早く部屋に行きなさいって」

「足が石みたいに動かないの・・・」

「ただいま」

「アレこちらの美人はどちらさん？・・・それになんでユウねえ下着姿？」

「なんでユウねえをお母さんが取り押さえてるの？」

「それより涼輔、いま有希が百合モード突入中なの

そこに居る子はあんたの兄で恭平……なぜか女になっちゃって
それを見た有希が、百合モード突入で襲われかけて、恐怖で足がす
くんじゃってるの

いろいろと原因を探るために帰省中だから部屋まで連れて行ってあ
げて」

「うんわかった・・リヨ かいです」

「しめんね涼輔」

うわっにーちゃんいやいや今は、ねーちゃんかな

めっちゃ美人じゃんてかチヨーおっぱい大きいし

こんなねーちゃんにいたずらされてみたいかな

」・・・」 弟、妄想中

「ねっ・・・ねえ、悪いけど部屋に戻るの手伝ってもらっていい？」

やばいめっちゃカワイイ・・・マジタイプどストライク

「うん、もちろんいいよ」トヨイッ

「ちよっ、なにをするの……バタバタ」カー

ねーちゃん顔真っ赤だ……ニヤニヤ……マジカワイイ
からかっちゃんおっかな

「ふぶっ・・・ねーちゃん顔真っ赤」ニタニタ

「うっ・・・な、何言ってるの・・・赤くないよ」

もうねーちゃんできていいや

「ハイ着いたよ」ポス

「あ、ありがとう」顔真っ赤

あれなんで弟相手にこんなに顔が熱いんだろう

お姫様だっこのせい？・・・それとも涼輔のことが・・・カー

もしかして心も女に？

そして今までの経緯を話した

そして弟には、心が落ち着くまで部屋で話し相手になってもらったが
なんか弟が、よそよそしいかも

「じはんができたわよ」

「ねーちゃんじはんだったっ〜」

「うん、いつか」

食卓に行くところには、お父さんが……

「よう恭平、久しぶりだなかあさんに聞いたぞ」

「あ、」

「でもおまえのその姿この前恭平がやってたゲームのキャラにそっくりじゃないか」

「うんて言うかそのままだし」

「じゃあきまりだな」「ニッコッ」

な、何が決まりなんですか？

「おまえのこれからの名前は、香菜だな」

ええ~~~~~名前変えるの？

「名前は変えないとだめなの？」

「戸籍を変えるんだからな？・・・あとゲームのキャラそっくりだから香菜ね」

ハハツ・・・そんな簡単な理由で

なんかうちの家族ってやっぱりおかしいかも・・・

第五話 「女としてのしつけと電車での恐怖」 (前書き)

今回は少しシリアスかも・・・

第五話 「女としてのしつけと電車での恐怖」

なんだかんだ言っつて、変な家族でも

久々の実家はとても安らぎ、心の休養になる・・・

おっともうこんな時間・・・お風呂でも入るか・・・

「かあさんお風呂入りたいんだけど・・・先にいいかな？」

「別にいいわよ・・・久しぶりの実家だし

今日一日何かとバタバタと忙しかったし・・・ゆっくり入りなさい」
ニコ

「ありがとう……タオルとかはどうすればいい？」

「今は手が離せないけど、後で用意するから先に入ってなさい」

やっぱり実家は落ち着く

狭いアパートでひとり暮らしをするよりも・楽しいし

何よりこう言った何気ない会話のありがたみは、家を出てから気付

くもんだ？

「アレー？おねえちゃんこれからお風呂？」「ニタッ

「うんそーだけど一緒に入るのはダメだからね？」「ヒヤヒヤ

「うん了解・・・知ってるよ・・・じゃあね」「ニッコ

あれ？・・・いやでも入るとか

何か言うのかと思いきや意外とあっさり・・・助かったあ

のちに香菜が入浴中に乱入してくるとは、気を抜きすぎて居た

「今日は疲れたからもおく寝る？」

翌朝、いつもどおり過ごしていたら母が一言・・・

「ねえその言葉使いどうにもならないの？・・・前にも注意したで
しょ？」

女の子が俺とか男口調はいけないって「

「いいじゃんうちなんだし
「

「外で猫を被っていても、いつボロが出るかわからないじゃない？
よしわかったわ・・・今日から一カ月私が女の子としての指導をし
てあげる」

ということがあり、かなりスパルタだった

言葉使いを間違えれば説教または暴力・・・どこの国ですかここは？

世界一安全な国日本じゃないんですかあ~~~~~？

「今日で指導は終わりよ……よくがんばったわね」「ニッコ

「うん頑張ったよ……まさかここまで話し方まで自然になるなんて

私も思わなかったよ……これで平気ね」

「うんそうよ本当に早かったわね……ついに明後日は学園デビュー
よ」

「うんそーなんだよなだから明日の朝には帰らないと

またつまらなくなるな やっぱり実家はいいね」

といつこと実家を出て駅まで送ってもらった私はといつと

平日の朝の通勤電車の中で・・・ただいま痴漢にあっています(泣)

「うっっ・・・うん・・・あっ」サワサワ

すごく気持ち悪いし怖い

警察の特集番組で痴漢逮捕に瞬間とかやっついて

いつも女性は何も言わなくて、後で警察に犯人を捕まえられるということばかりで

なぜ反抗しないんだろうと疑問だったが・・・理由がよくわかった

足がすくんで動かない・・・

体が棒みたいに固まってしまっただ

最初はスカートの上だったが次第にエスカレーターし

今では、胸もいじられている

「あつダメ・・・そこだけは」

なんとパンツの中に手を入れてきたのだ

こわい・・・こわすぎるよ・・・うう、誰か助けて・・・

「うう・・・グスッ・・・もうほんとにやめてください」

すると痴漢男がこんなことをささやいてきたのだ

「こんなに股を濡れしておきながら本当は気持ちがいいんだろ」「ニ
ヤニヤ

私は背筋に寒気が走った

早く終われ早く終われ早く終われ早く終われ早くお……………

「口では拒否をしても、体は素直だな」「ニヤッ

クチユクチユクチユ

ダメ、こんなのに感じたくないのに

声が出ちゃいそう・・・私男から女になってこんな快感知ったら

おかしくなりそお・・・いや絶対おかしくなっちゃう

「ハアア・・・ハア・・・ンっ・・・ハア」

「いい体だったぜ」

男はそういうと静かにひとこみとともに消えていった

私は怖かった・・・それからも恐怖が続いた

私は許せなかった一瞬でも痴漢されて、気持ちいいと感じてしまった自分が

このことはだれにも話せない・・・心の傷になった・・・

内に帰ると香菜は倒れこむようにして

その意識を夢の世界へと飛ばした

その日の午後に家のチャイムが鳴った

ピンポン

「は、はい、どなたですか？」ガチャ

「いやあー久しぶりだな恭平？」

「あつ・・・なんだ理欧か・・・」

「おっ、おいどーしたんだよその顔とテンション初めて女体化した時の恭平と全然違うじゃん」

「・・・上がったよ」

それから私は、なぜこんなに元気がないのか聞かれたのですべてを話した

私が痴漢にあったこと・・・名前が恭平からかなえ変わったこと

なぜこんなしゃべり方に変わったかなどなど

少しは、気持ちも落ち着いたし明日の準備は万端だから

今日は帰ってもらい、代わりに悠里に事情を話し一晩泊ってもらった

悠里は、思い出して泣き出してしまった私をそっと包んでくれた

私はあらためて思った・・・心や体が女に変わってしまっても

まだ悠里のことが好きだということ・・・

第六話 「学園デビュー 私の名前は狭田香菜」 (前書き)

じつは学園デビュー

第六話 「学園デビュー 私の名前は狭田香菜」

ということで今日は、恭平改め香菜ちゃんの学園デビュー前日です？

ということでしたいま香菜のうちにいる私悠里ですが

な、なんと私のいとしの香菜が痴漢にあったということなのです
(怒)

そのせいで香菜の心に大きな傷が出来ました許せません

デスが家で静かにしていても仕方がないということだ

今日は、二人でお出かけすることに決定

「いやなことを忘れるためには、やっぱりはじけ飛ぶことですよ？」

「うん・・・それもそうだよね・・・これからもあるかもしれない
いし

・・・こんなことでクヨクヨしてられないのかもね」

「おっ？・・・さすが香菜だね相変わらずサバサバした性格う？」

とじじいじとで今日は、遊園地に行きます？」

「やったーこらって絶叫マシンがいっぱいあるじゃん

私こら言ったのだいすきなのお」ワクワク

今日は香菜を遊園地に連れていくことで

昨日のことは立ち直ってくれたように見えたので、一応大成功だ???

「ねえねえ香菜あ??」

「なに悠里？」

「明日の登校ってどうするの？　一緒に行ってもいいの？」

「たぶんやめたほうがいいと思う、転校してくる前に

転校生と一緒に学校に登校してるの？ってなる思っから・・・」

「ああ〜〜、それもそうだね」

そつえば私何か悠里に相談したいものを忘れて居る気が・・・

「あっ……そういえば名刺」

「へっ……何が名刺なの？」

「ホラこの前電話で話した、モデルについてよ……」

「あゝああ、その話ねやつちやいなさいよ

あんたチヨ一きれいでスタイル抜群だからすぐトップよ？」

「その件なんだけど、一人じゃ心細いから

悠里も一緒にやってくれるなら……. やってもいいかなって」

「うんうんって……ええー……無理無理

私じゃ不釣り合い……無理無理」

などとかかなり盛り上がった

明日はついに学園デビューだ……かなりの緊張

期待と少しの不安、それからは特にないかな

せっかくだから悠里とは、知り合いということにしてもらって

明日から一緒に登校しようって……

「今日は遅いから寝よう……」

「おやすみ悠里」

「おやすみ香菜」

今日は学園デビューの朝

着方がわからない女子の制服に少し戸惑う私に

悠里が見本を見せながら制服を着てくれたのでその通りに着てみたら案外簡単

デザインがかわいいので個人的にお気に入り

私は胸が大きいので少し特注・いやオーダーメイドかな（笑）

「じゃあ、いっつか学校へ」

「うん・・・でも少し緊張するな

まさか女の子になって学校に登校することになるとは思わなかった
もん」

「わかるわあ～～その気持ち

わたしもまさか幼馴染が女体化するなんて夢にも思わなかったよ」

やっぱり久しぶりの登校は、楽しいな

やっぱり悠里といると心が安らぐし

学校に着くと悠里は教室へ、私は職員室へ行くためいったんバイバイ

少し職員室あで行くのに周りの視線が気になったが無視つと

職員室へと到着

コンコン
ガラガラガラガラ

「失礼します、転校をしてきた狭田香菜と申しますが

あまのりゅうじ
天野龍慈先生はいらっしやいますか？」

「はい、私です。」

とりあえず中に入ってきなさい・・・椅子は用意するから」

「はい・・・失礼します」

「ええ、と何から話そうかな?」「うん

「あの？」

「な、なんだい？」

「実はこの学校に通う蓬田悠里さんとは友達なんです
だから同じクラスかどうか見ていただけませんか？」

「ああそうなんだ

それならどうかな？・・・確か蓬田は・・・

おおっ・・・キミと同じで三組だ？」

やったーよかったー

これでまた悠里と同じだ・・・これで席が近ければ話せるぞ

「っと、もうこんな時間だから君を3組の先生に

任せるから後のことは、彼女に聞くように

お、い、美都先生この子を頼みます」

「はいわかりました……よろしくね」「ニ」ッ

「よろしくお願いします

えっと私は、狭田香菜と言いますこれからよろしくお願いします」

「あら・・・ずいぶんかじりまっているのね

私は美都響子みときょうこよ、よろしくね」

もうすぐ教室だ・・・みんなどんな反応をするのだろう

まさに僕の容赦は、あの人気ゲームの主人公なんだからな

「狭田さん、もうすぐ教室です・・・心の準備は・・・？」

「OKです。　どうもどうも。」

「それじゃあ私が入ってと言つまで廊下で待っててね」

ガラガラ

「それじゃあ朝の挨拶」キリッ

うわぁ　人が変わったよ先生

裏ではこんなテンションだったんだって初めて知ったし
教室の感じのほうが見慣れているけどね

「それでは朝の連絡を言う前に皆さんにお知らせがあります」

「ええーなになに」

「もしかして結婚？」

ワイワイガヤガヤ

「ええーと今日は、クラス仲間が一人増えます。」

「女子？男子？どっち」

「勿論女だ」

「何言ってるのよ男よ」

「美人がいいなあ」

「はあくさわやかなイケメンがいいわ」

「はいはい静かに・・・それじゃあ入ってきて」

ガラガラ

シーン

「えつと今日から新しく転校してきました狭田香菜です。

えといろいろとわからないことがあると思いますのでよろしくお願
いします

あとみんな仲良くしていただけると嬉しいなあと思います」「ニコッ

つと自己紹介がおつた瞬間教室は大騒ぎ

えっなぜかって?・・・それは、子の容赦だかららしいよ

かなりの美人でその凛とした姿から男子だけではなく、女子からも
人気に

休憩時間はもう大変・・・とにかく質問質問質問

たとえば顔立ちがハーフっぽいけどどことのハーフなの

彼氏はあるの? 名前が狭田だけど恭平と関係あるの? どこから
来たのかなどなど

もう疲れた・・・

一番びっくりだったのは、初日に告白されたこと

勿論答えはNO、まだあつたばつかでお互いをよく知らないからだ

でもなんだかんだ言いながらも充実した一日ではあつた・・・

第七話 「香菜は人気者!？」 (前書き)

やっとレポートが描き終わったと思ったら

今週の木曜日からテストスタート (泣)

第七話 「香菜は人気者!？」

学園デビューからもう一カ月

相変わらず男子からの告白は多い

特に困っているのは、同学年だけではなく上下級生からもあるのだ

なかには特殊な子もいるし百合やキモいのもいる

それになぜか転校をして一週間もしないうちに

この学校で私を知らぬ者はいなくなったのだ

えっ・・・なぜって・・・それは、私が悠里と一緒に雑誌に載ったから

えっ?・・・何の話って

前に実家に帰るときに、声をかけられたじゃない

答えにOKの返事をしたの・・・そしたらこのありさま

きゃあー香菜さん？ 俺と付き合って〜

ワイワイガヤガヤ

すると一人の少女がこちらえ歩み寄ってきた・

「あの私、1年の神田沙紀かんだ さきって言います」

「うん、でなにかおつなの？」

「今度、狭田さんのファンクラブの触れ合い企画見たいのをやりたいので

出ていただけないかなっと思って・・・」

ええっ？ 私にファンクラブがあるの？

しらんかったわ〜

どうしようもそれならこじつけてみよう

これから絶対に普通の学生生活に戻れるように条件を付けてみる事

にしようかな

「別にいいわよ・・・でも一つ条件があるかな」

「なんですか？その条件は」

「いいじゃあ言うつわよ・・・定期的に集会を開いてあげるから

私にべたべたひっ付いてこないということを約束させるなら出てもいいわ」

「了解です。がんばります」

しかし今の子気合入ってたなあ〜

なにをそこまでさわぐかねえ〜、わたしには、わからんわからん

そして集会当日

「ええ本日は、狭田香菜ファンクラブの集会にお集まりいただき誠にありがとうございます。

本日司会進行をさせていただきます、神田沙紀です

どうかよろしくお願いします」

ふお〜などと盛り上がっている

なんか出ていく気が失せるようなテンションの高さだ

いやだな

「この集会を開くにつれて、狭田さんより一つ条件を出されました

それは、普段は普通の女子高生として過ごしたいから

あまりうるさくしないで、普通に接してきてということだそうです

みなさんいいですね

一同 はあゝい

「それでは本日のメインに出ていただきましょう狭田香菜さんです」
「？」

「ええ」と、私にもうすであつたことある人いると思うけど

一応自己紹介のほうを、狭田香菜です

先月に転校してきたばかりです

基本的に集会は、質問タイムにしたいので質問がある方はどうぞ

するとかなりの人数当てを挙げた

なんか喧嘩が始まったり、人ごみで違う人が当たったと勘違いしたり
もうグダグダ・・・わたしはかなり疲れた

だから寝る

ッと思ったけど予定は見ておかないとってあすは仕事じゃん？

大変用意をしなきゃ・・・やっぱり眠いから寝よう

第八話 「こんな日常だから疲れが・・・」 (前書き)

テストも終わりパソコンも復活

というところで再開です

第八話 「こんな日常だから疲れが・・・」

今日は悠里と共に学校帰りにやらなければいけないことがある

それは・・・雑誌に載せるための撮影だ

今回は夏物らしい、何を着るのかはまだ分からない

言うてからの楽しみなのだがこの後悠里の一言で私はどん底に・・・

「ねえ～ねえ～ゆづりい～今回は夏ものだってえ～」

あっちなみになんでこんな口調かというと

意外とモデルの仕事が楽しくテンションが上がっているのと

大好きな悠里（別に百合ってわけではないぞ私が元男だから？）

と一緒に仕事をすることによって少しでも長くいられるからだ

「へえ〜そうなんだあ・・・じゃあ香菜の水着も見れるかも」ワクワク

「えっ？・・・み、水着・・・」

そつだ夏といえば水着だったんだあ~~~~~
(泣)

「私は着なれているけど香菜は大丈夫なの？」

「ワ、ワタシハダイジョウブダヨ・・・ダダダ、ダッテ

オンナノコノベンキョウノトキニミズギモキサセラレタリシタカラネ

ハッ、ハハハハ、WWWWW「故障中

「わあっちよっ、香菜戻ってこい・・・カナ~~~~~」

しばらく他の世界へ飛んで行っていた香菜ちゃんも戻ってきたところでは再開b y作者

「おいしい香菜、早く起きないから作者が出てきたぞ？」

「はっ、それだけは許さんどこだどこにいる」

「もう遅いよ……一言残して帰って行ったわ」クスクス

「あの野郎次に見つけたらマジで殴ってやるからな(怒)」

おおつと危ない危ない

様子を見に出てきたただけなのに、タイミングが遅れていたら

俺は殴られていたのか、セーフセーフ

「じゃあ、とにかく少し急ぐか、少し時間が迫ってきてるし・・・」

「って、本当にやばいじゃないか、急ぐし」

数分後

「セーフ?・・・間に合ったあ」

「もつ?・・・香菜ったら足速すぎ?」

「そっかなあ?・・・普通だと思っけど」

「あんだ絶対、陸上部に入ったほうがいいと思っわ」

「足が太くなりそうだからやめとく」笑

「ふうん・・・まあいいわ、とにかく行く」

私はいつも思うのだが、意外とカメラマンのテンションが高いから

何回も撮影をしていたとしても

いつもこのテンションに付いていけるのかなあ？

なんて思ってしまうが意外とノリノリになれるから楽しい

「はいじゃあ次は香菜ちゃん一人で撮ってみよう」

パシヤ パシヤ

「じゃあ、手を腰に当ててみて」

パシヤ パシヤ

「香菜ちゃんは少しボーイッシュだから少し足を開いて立ってみようか」

悠里ちゃんは香菜ちゃんの腕に手を絡めてみよう」

などと、正直言って同じ場所で立ちっぱなしというのは

かなり疲れる・・・いつもふくらはぎがパンパンだ

「ねえ香菜あ・・・今日はなんか撮影が長くて疲れたよね?」

「うん、私も思ったよそれは」

「時間も夜ごはん時だから、どっかで食べていかない？」

「かじりかじりかじりかじりか」

「そのファミレスでよくない？」

「かじりかじりかじりかじりか」

最近女になってから友達とファミレスに来ることが多くなった

だから正直に言つと・・・財布がきついかな（笑）

「ねえ香菜って最近変わったよね？」

「えっ？・・・そお？・・・変わってないと思っただけだね」

「変わったよ?・・・だって普段から堂々とするようになったし

それに、モデルの仕事のときなんかすごく楽しそうだし

なんかすごく自分に自信がついたんじゃないモデルの仕事のおかげ
で」

「うん?・・・でもそう言われればそうなのかもしれないね」

「香菜はかわいいし美人なんだから堂々としてないと

そのモデルのときみたいな凜とした感じを出せないよきつと」

「別に凜としてなくても普通でいいよ」笑

なんだかんだで9時を過ぎてしまった

「じゅあ悠里じゃあね
「

「うんじゃあね香菜？
「

「きをつけてかえれよ」(笑)
「

「それはこっちのセリフですう〜」(笑)

「じゃあまた明日」

なんだかんだですごく疲れたなあ

っていつかもう女の子になって3カ月かあ

早かったなあ、本当にこの間にいろいろあったな

ナンパには遭うし、痴漢にも遭うし、モデルにはなっちゃうし

学校ではなんかファンクラブが出来るし

なんか落ち着かないし、いまもなんかストーカーに遭ってるし

リアルに空手が柔道やりたいなあ

そうすれば一発で締め上げれるのに、だけど・・・

モデルをやってるせいでそれが出来ない(泣)

もう嫌だ?・・・

なんでこんな暗い道を通ってきちゃったんだろ？

遠回りをしてでも明るい大通りを通ればよかった

もおゝ・・・わたしのバカバカア

あっそういえば悠里が私の足が速すぎるとか言ってたから

試しに走ってみるか・・・幸いなことに制服だから運動靴だし

バツ　　タツタツタツタ

うわ追いかけてきた・・・でも・・・

おっそ)笑) W W W W W W

マジ受ける足遅すぎ

「なんとかまいたか・・・さて帰ろっ」と

がちや

なんとかかまいたけど

毎回毎回こんなようなことがあってはたまらないから次は

大通りを通って行こう

そんな平日さよならを告げるように眠りに落ちていく香菜であった

第九話 「何が何だかもうさっぱり」 (前書き)

今回は新しいキャラが出てくるよ

第九話 「何が何だかもうさっぱり」

昨日の疲れもあつてか深い眠りに着いた私を待っていたのは

なんとThose who travel in the time
e ーこの時を旅する者たちー

の世界であつた

だけどここの部屋はどこだろう

私がプレイしていたところと少し違う

それよりなんで夢でこの時を旅する者たち絵の世界にいるんだろう？

まあ実際にこの世界に行ってみたいと思つてたりもしたからいいん
だけどね

なぜか部屋の外が騒がしい

なんだろうと思ひ耳を澄ますと

香菜さまが、香菜さまが目を覚まされたぞ

早く王にこのことを

王様?・・・なぜ??

そんなことを考えていると部屋の扉が叩かれた

はい、びんびん

がちゃ

「おお本当だ本当に目が覚めたのだな、よかった本当によかった」

「あのすみません質問してもいいですか？」

「なんで敬語なんだ香菜……父親に向かって他人行儀は悲しいぞ」

「えっ！あなたは私の父親？」

「ああそうだが……まさかっ？記憶がないのか」

「いえ別に記憶がないわけではありません」

ただわからないのはあなたがだれで何があったか？

私なぜここにいいのか、そしてここがどこなのか？

でもなぜこの町のことだけは記憶に残っているの

だからちょっと街を探索させてもらえませんか？」

「町を出歩くことはすが、だがまずは順を追って説明しよう

私は、ヒュンデルラ王国第57王の神木孝紀かみきたかのりお前の父親だ

そしてここはヒュンデルラ城の香菜の寝室だ」

あれ意外と日本人みたいな名前だな

「そしてお前は神木シルディア香菜、

私と妻のシャルル・ノベルズとの間に生まれた子で

凄腕の戦士でもあるがヒュンデルラ王国の姫である」

ええ~~~~私ってこの世界でお姫様だったっけ？

もう何かと2カ月はやってないから忘れちゃった

どういう設定をしたかどうかを

「なぜ7年も眠ってしまったかは何ぞだが

全然変化がないとは、なんとも神秘的だね香菜は

普通は少し歳をとるのだけど17歳のままじゃないか

本当に不思議だ・・う~~~~ん

「ねえそんなことより街に出ていい？」

「あぁいいが一日くらい足をならしてみたらどうだ

長年ベッドで眠りっぱなしだったからなまっているだろっ」

「そんなことないんだけどな」スツ　　タツタツタ

「ほほほじゅんぽんぽん」

「まあ今日はもう夕方だから明日にしなさい」

「はい・・・わかりました」ムスッ

「それでいい」

明日は念のために護衛をつけようと思っがどうするん？」

「いらないわ・・・だって私お姫様なんだから

そんなのを引き連れていたらばねちゃうじゃない

私はお忍びがいいの」

「わかったではそうしよう」

そして次の日に本当にゲームと同じかどうか

いろいろと歩き回ってみたら、もうそのままであった

私は楽しくて町を探索しまくっている

なぜかひそひそと私のことをを言っているように聞こえるが

気のせいだろうか？まあいいや

1時間ほどしただろうか・・・疲れた私は少し町から外れた湖の見える丘に来ている

「まさかこんな形ではあるがこのせかいにいけるとわなあ」

ゲームのグラフィックが現実のものになるとやはりすごいもんだ
なんて言っただって地球にはいない動物や物などがある
なんて考えていると誰かが私の名前を呼んでいた

「お〜い・・・お〜いそこにいるのは香菜さまですよっ?」

そこには、私より少し年下くらいの女の子がいた
ダレ?

「ああ私ですか？・私はアイリスと申します

こう見えても神様に仕えているんですよ？」

「えっ！？・あなた人の心が読めるの？・・・し、しかも神様に仕えているの？？」

「応反応しておっ」

「なにも反応しないのはかわいそうだ・ハツタリを述べているんだろっ」

「そんなことがるはずがないこれは私の夢の中なのだから」

「ハツタリじゃありません??？」ムスッ

「ハイハイごめんごめん」笑

「何ですか最後の（笑）って（怒）」

「ごめんごめんでもそんなこと言いながらあなたも（怒）って

使ってるじゃない」クスクス

「これは作者が入れてるの？（怒）

うわっまたでたもついやあ~~~~~（泣）」

「こればかりはしょうがないわね・・・書き始めた当初からだから

でっそのカワイイ天使さんは、私に何の用かな？」ナデナデ

「うふふ〜頭なでられるの好き〜・・・じゃなくて頭なでないでください？」

「いいじゃないかわいい子は愛なでたいものなのよ」フフッ

「ああ〜もう分りましためんどうなんで本題に入りますね」

「……………うん……………」
「ナデナデ」

「ええつとあなたをこの姿にしたのは、ほかならぬ私の主で神様でもある

イレーナ様がなさいました。

この世界はあなたの世界からしてみればゲームの世界にしか感じられません

一つの世界としてイレーナ様が作られた現実の世界です

つまりあちらの世界からしてみればこちらもゲームの中と同じようなものです」

「えつと・・・つまりあの世界はゲームではなく現実ってこと？」

「ええそうです。」

「じゃあ今も夢の中ではなく現実ってこと？」

「はいそうですよ・・・理解が速くて助かります」「ニ」「ニ」

「じゃあ私のもとにいた世界はどうなってるの

急に消えたりしてるわけじゃないよね?」

「それはないのでご安心を・・・

先ほども申しあげましたがどちらもイレーナさまがご管理している
世界です

そしてあなたを香菜の姿にしたのも、この世界へ連れてこられたのも

「イレーナさまなので「じゃあ」です。」

「なぜ私が選ばれたの？」

「あなたの前世がこの世界の人であり数多くの伝説を立てていた

あのロザリナ・カルメン様だからよ。」

ロザリナ・カルメン・・・Those who travel in the time (この時を旅する者たち)

の世界が闇に閉ざされた暗黒の時代があった

その闇を一人で追ひ払いこの世界に大いなる平和をあたえた伝説の女戦士

彼女のその温厚な人柄と慈愛からこの世界の聖母マドンナとも呼ばれているという設定が確かあった気がする

「そんな・・・彼女が私の前世？」

私は地球の人間よ、それにこのゲームを偶然にやったただけよ？」

「いやそれは偶然ではないのよ・・

ロザリナさまはお亡くなりになった後に天界にて

我が主イレーナさまこうおっしゃられたのよ

（今は、一応はこの闇を追い払い平和な世界であるが

それは一時的なものにすぎないと思うの

また闇はやってくる・・・だからその時のためにも

私の力を他の静かな世界の新しいいのちの心の奥に秘めてもらいた
いの

その闇が再び世界を覆うときその子がこの世界を救ってくれるよう
に）

とおっしゃったそうだ」

「なんとなく経緯がわかったただが一つ質問いいか？」

「はいなんでしょ？」

「何でもとの男じゃなくて、女なのしかも自分の設定したキャラなの？」

「ああそれはですね・・・あなたがこの世界のゲームをプレイしていらしたので

こちらの世界に神木シルディア香菜ってひとが存在しているんです。

だからこっちに新しく狭田恭平の体を作るよりも

この香菜の体に恭平の魂とかを乗り移らせたほうが簡単だったから

あとは神様の趣味かな（笑）」

「ふ〜んで終わったら体は元に戻るの？それに神様の趣味って何？」

「体が戻るかどうかは私にはわかりません

あとイレーナさまの趣味ですか・・・聞きたい？」

「えっじゃあ体が戻らない可能性もあるのか

まあなれてきたから別に不便ではないけど

で神様の趣味とは結局何なの？」

「イレーナさまは百合なの

だからあなたのその設定したキャラクターの姿に一目ぼれしたから

恭平で作るより香菜で作っちゃおうってなったわけです・・・はい・

・なんかすいません」

「 」

「 」

「あの今日はもう疲れたんで元世界に帰っていいですか？」

「あっハイ・・・いいですよ

次に来たときにはイレーナさまに会えるようにしますから

じゃんじゃん文句や愚痴を言ってやってください

彼女マゾなんで喜びますよ~~~~~) ^ ^ (w w w w w 「ニシシシ
シッ

「.....」

こうして異世界との2重生活が始まった

第十話 「事情説明!？」 (前書き)

神様が軽く暴走します

今回は軽くガールズラブが入ります

第十話 「事情説明!？」

眼が覚めるといつもの部屋？

ではなかった・・・・・・「」はど「」ですか~~~~~??

しばらくすると悠里と理欧が来た

なぜ私がここにいるのかと尋ねると

香菜が学校に来なくて連絡も何もなかったから

家に行ってみたら、声をかけても起きないし何をしても無駄だったから

病院に連れて行ったということだった

くそあの神様とアイリスめ?・・・全然対処できてねえじゃねえか

(何でしよう香菜さま)

「……むじ」

「なっなにどうしたの香菜？」

「いや、今声がしなかったか？」

「別にしないけど」

「どこからするのだろうか?」

(「いいです香菜とま・・・もう分らないなら姿を表しますよ」ピョーン

「もう何度も頭の中に声をかけたのに

無視とはひどいですよさすがに？」

「おまえは」「誰っ？」「アイリス？」

「ちょっと香菜あそのアイリスって子は何なのよ？」

「なんでこの世界にいるの？」

あなたは夢……じゃなかったんだやっぱり……」

「どっしたの何があったの？そしてこの子はだれ？」

私はそうやって悠里と理欧に質問されたので答えることにした

昨日走って帰ったからすごく疲れて、すぐに眠りについたこと

夢の中の出来事と、私の体がこういう風になった理由

この子は、神の使いであることも

「そんな夢や小説みたいなこともあるもんなんだね」

「私も最初は夢だと思ってたよ……しかもアイリスが出てくる今の今までは……」

マジで現実だったとはという気分がハンパない

「なのでこれから香菜さまは、定期的にあちらの世界へ行かれる」となります

「ねえねえ今思ったんだけど、毎回この言う事になるんじゃないよね？」

「あっそれについては大丈夫です」

私^ががしっかりとい　リスさまを叱っておきましたんで・・・」

「あとさ私だけじゃ心細いから悠里と理欧も連れて行けないかな？」

「「えっ私も!?!」俺も!?!」

「えっ?.....ダメえなのお?」ウルウル

「べ、別にいいけど……」

「俺も別に……」

「じゃあ決まりだね」

「ねえアイリスう……どうできるのかな？」

「たぶん大丈夫だと思いますよー リスさまにできないことはない
ですから」

「ただど面倒だからって言うて、あなたたちの作ったキャラクターに
なるかもしれないけどいい？」

「別にいいですよー」

「じゃあ香菜さま、イリスさまが天界でお待ちです。

今から付いてきていただけますか？」

「私は別にいいけど……悠里や理欧が……」

「私たちのことは気にせずに行ってきなさいよ」

「ありがとうじゃあ言ってくるね」

私は目を閉じると吸いこまれるように意識が乗り移って言った

「さあつきましたよ・・・少し遠いので

急ぎます・・・今からこちらに乗って移動しますからよろしくお願
いします。」

なんか面倒だなあ〜この世界から異世界に移動し

そこからまた展開に移動ってかなり面倒だね

でもアイリスが言うには、地球の私たちがいる本当の世界から

天界に行くと死んでしまうことになるから遠回りをしないとイケな
いそうだ

20分ほど行くと今までとは全然違う

なんて言ったらいいんだろう・・・説明のしようがない

天界というものをなめていた・・・地球よりも文明が進んでいるが

木々が生き生きとしていて環境もすごくいい

ある意味桃源郷というのはこのことかもしれないと思ったくらいだ

そこのはずれには、私のもといた世界では見ることが出来ないよう
なくらい

綺麗なお城が立っていた

「キレイ……素敵……」

「そーなんですよ・私も何度も見ているんですが
飽きないし何度見ても感動するんですよ」

「その気持ちわかる気がします・・・何時までも見ていられそう・・・」

それは本当であった

・
・
とんでもなく大きなお城なのに、汚れ一つない純白の建物であった。

「ああ急ぎましょう・・・予定の時間が迫っています」

アイリスの案内によりお城に入り

王の間に来た・・・・・・・・ドアが開けられそこには・・・・・・・・

本当に今までに見たことがないくらいの美女が立っていた

まさに女神さまって感じ

「お待ちしていました香菜さん、さあこちらへお座りください」

「は、はい・・・し、失礼します」

「そんなに硬くならないでちょうだい

もっとリラックススリラックス、肩の力を抜いて深呼吸」

「スーハー、スーハー」

「落ち着いた？」

「はいおかげさまで」

「それは良かった」

「ねえねえイリスさま」

「何アイリス・・・今は香菜さんと話してるんだから手短に頼むわよ」

「もっさい リスさまの趣味や性癖のことは

私が香菜さんにはらしてしまっただから、そっやって猫かぶっても無駄ですよ」「ニヤッ

「ええ〜〜っ！？また喋っちゃったの？

内緒にしてって言ったのに・・・うっ・・・うっ〜」ポロポロ

「あの・・・わたしは、別に人それぞれ何でいいと思いますよ

特に百合とか関係ないと思いますし・・・ねっ」「ニッコシ

「そ、そうよね・・・じゃあかなちゃんさっそく

私はあなたに一目ぼれしたの好きです付き合って~~~~~」

バコッ

「ちよっ！？アイリスそんなことして大丈夫なの？」

「大丈夫なのです・・・これくらいでは動じないのです」

「うっっっっっわああああん……いたぁぁぁぁぁいいよお
く」ボロボロ

「あれが大丈夫なんですか？……しかも神様ってあんななの？」

「うわぁ~~~~んかなちゃんまであたしのことバカにしたぁ~~~~
~~~~」

「馬鹿にしてないから・・・ねっ・・・それにこんなにもかわいくて綺麗な

神様なら何があっても許せちゃうかな」

「あっ？？今のは禁句？？」

「えっなにが起きてるの！？なんか体が火照ってきた」ハア ハア



「くそ今日に限って術がしっかりしている」

「香菜ちゃんは何をしても許してくれるって言ったから

私はカナチャンを襲っちゃう・・・だけど許してくれるんでしょう

何をしてもいいんでしょう」「サワサワ

「トヤッ!?!?・・・やめて」

「あなたのこといつも頭で想像していた

だから本物とやれるなんてすごく興奮するわぁ

あたしががんばっちゃっもん」

ヌププッ

「いつ痛い・・・ぬ、抜いてえ指を抜いてえ」

「大丈夫処女膜は破らないから」

くそなんだこの術は・・・体が火照って仕方ない

「アイリスううはっ早くじゅつをといてえうう」

「かあううなあううちやううん」

「解けた??・・・さあ今すぐ罵倒してあげて」

イレーナさまにはそれが一番だから」

「馬鹿、この糞イレーナ私をこんな姿にしやがってふざけんな

このクズ野郎、最低……………」ペシッ　　パシッ

「ああごめんなさいごめんなさい」ゾクゾク

「あんなにか消えればいいのよ、この自己中野郎

カス・・・あなたなんか私の奴隷でいいのよ」

「ハイ奴隷にならせてください」ゾクゾク

やばい新しい何かに目覚めそう

こんなんことを30分もしていたかと思うとなんか鬱だわ〜

「でわたしは、これが終わったら男に戻ることも可能なわけ？」

「あれ今もあなたの世界でああなたの体は恭平にも香菜にもなれるようにしてあるし

心も仕草も変化するようにしてあるわ

あなたに教えるのを忘れてしまっていたの申し訳ないわ」ペコリ

「この世界にわたしのパートナーを連れてくることは可能ですか？」



「余裕余裕・全然OKだよ〜」

「そうなんだあとは・えっとなんだっ たけな

そうそうなんかゲームの世界とは少し違っけどどっつなってるの？」

「いいかしらここは現実の世界なのよ

あなたのやっているのはこの世界とつながりのあるただのゲームよ

だから現実と所詮ゲームでは話が違ふの・・・わかったかしら」

「まああ・・・なんとか（苦笑）」

「あとこっちに来ている間のあっちの体の管理をしっかりと  
ください」

「あっそれについては、ごめんなさい」

「こう言ったことはもうないから安心してくださいね。」

「そろそろなんかリアルに眠いんで、家に帰ってもいいですか？」

「いいですよ。後これを渡しておくわ・・・これがあればいつでもここに来れるから

また来てね」

「はいわかりました」

「ねえねえ敬語やめないてかやめなさいむず痒いわ」

「わかったこっちのほうがしゃべりやすいしね

またくるから楽しみに待ってなさいよ」

「な あ じ じ」

「. . . . .」

「こうして元の世界に戻ってみるとそこには悠里と理欧が

「あれまだいたの？」

「まだってさっきからまだ1分しか経ってないわ」

「えっそうなの」

なんだ神様しつかりやってくれてるじゃん

今度ご褒美にキスしてあげようって



「言ってきた話を聞いたら、二人とも来れるらしいから

よろしくね」

「おう俺は構わないぜ・・・なあ悠里」

「ええそりゃ親友のためなもの」

「ありがとうじゃあ明日休みだからさっそく試してみようね」

そうして私たちは別れた

第11話 「異世界へ親友と共に・・・」(前書き)

前回のとき第11話を書いている途中にね落ち

文章が全部消えてしまったため余計に更新が遅れました

こんなのいいわけですよね・・・はい・・・すみません

第11話 「異世界へ親友と共に・・・」

ついに今日は、悠里と理欧と共に異世界へ行く日が来た

悠里と理欧の二人にはこの世界はほぼゲームと同じだと伝えてある

一応今日は町の探索とクエストだ

待ち合わせ場所はわかりやすいようにヒュンデルラ城

正門から入ったところにある噴水広場にしてある

やばいもうこんな時間？

早くしないと悠里と理欧にまたいじられるな

そして異世界へと意識を飛ばしていった・・・

「ふんふん」

「おはよーい！これこそお味噌汁だよ．．．」

「はあ、今は何時だ？」

「それではお着替えをお手伝いさせていただきますので」

「いや・・・いつも言っているが一人でできる

あと最低限のことはいざというときのために何かできるようにしておきたいのだ

だから今日の予定だけ教えてくれないか？」

「かしこまりました」

今日は、午前10時より姫様が以前申しあげられた

国民との交流が入っております・・・

それまで時間がございますので午後からの町の探索

クエストなどを共に行動されるお連れ様を城内の客間へ通してもよいということなので

押し触れ合いの前に来られた場合はこちらへお通しく下さい」

「わかったわ・・・触れ合いのときは軽装でいいのよね

あのドレスでいいわよね」



「ハイよろしいですよ・・・」

「一つお願いをしたいのだけれども、午後から街に出るよう」

「服をクローゼットから出してすぐ着れるように準備しておいてほしいの」

「かしこまりました」

それでは、朝食の準備が整っているので「こちらへ」

スタスタ

相変わらずでつかいなあゝ

まあお城だしね

一人だったら絶対に迷子になる自信がある・・・

まっメイドがいるから安心だけどね

ガチャ

「おはようございますお父様お母様お兄様」

「おなまのしん様様」

「よお様様おはよう」

「相変わらずテンションのほつが高いですね兄さまは」

相変わらずこのしゃべりはむず痒い

慣れてきたしゃべり方よりもっと上品だからだ

「それでは、平和なヒュンデルラ王国と豊かな食材を守ってください

神様に感謝し、いただきますしょう」

こんな風に言われている神様は実は

（「もつと罵って？」ゾクゾク）      これ神様

こんなMだと知ったらみんなはどんな反応をするのだろうか

まあ神様いわくかわいいか美人限定らしいけど・・

相変わらず朝からものすごく豪勢だ

自分が日本でこんな朝食を見ることはなかった

ホテルのバイキングをすごいと思っていた私がバカみたいじゃないか

こんなの食ってたら元の世界のご飯が食えなくなりそうだなあ

「そういえば香菜、今日はこの国の民たちと交流をするようね  
なんだ急にそんなことを思ったの？」

「ハイお母様・・・私自身、眠り続けて居たので町や民の生活が  
どう変わったのか私自身が肌で感じたいと思ったからです・・・  
それに午後からは久しぶりに連れと一緒に軽いクエストをやってみ  
ようと思っています」

なので今日はさっきから楽しんで仕方ありません」

「そうなの、まあほどほどにきなさいね

また何年も眠られたら心配でたまらないんだから

あまり、心配させないようだね」

「はいわかりましたお母様」



それから30分は朝の時間を楽しんだ

ついに交流イベントに時間だ

うわ・・・すごい人・・・まじかあ

「ただいまよりヒュンデルラ王国の姫君

神木シルディア香菜さまが来られる・・・失礼のないように」

「みなさんおはようございます」

皆さんにも伝わっていると思いますが

私は、ここ何年か病に冒されていたため

表へ出ることができませんでした。」

「なので今の皆さんの生活情報や生活感を肌で体験したいと思い

この場をもうけさせていただきました。

私は人とおしゃべりするのが好きなので1時間と短い間ですが

楽しく雑談でもしましょう。

午後には街を回る予定なのでみなさんよろしくね」

「あと堅苦しいことは嫌いだから今の人の話ガン無視でいいよ

みんなため口のほうが楽しいし

あとあまり同年代の友達がいなかったからお友達募集中よろしくねえ」

この風景を少し離れた所から見る二人組がいた

「げっ何あの人ばかりしかもなんで香菜がいるの？」

「とりあえず行ってみようぜ？」

「あつ、あれは理欧と悠里・・・お〜い」

「お〜いじゃねえよ香菜？」

「これはどういふことなんだよ」

「えっ？何が？」

「ねえなんでそんな恰好してるの？」

「それは私がこの国の姫だからかな（笑）」

「.....」

「.....」

「変なウソはやめろ」

「  
・  
・  
・  
・  
・  
本<sub>ほん</sub>気?」

「  
うん  
・  
・  
・  
・  
・  
そう<sub>そう</sub>だけど  
」



「そついでば今日は午後からにしよつと思つてゐるんだ

客間で休んでてよ今案内させるから……

おゝい  
「

「ハイなんでしよう香菜さま

この人たち私の連れなの、客間に通してあげてほしいの」

「かしこまりました」

「という事だから少し中で待っててくれない？」

「そねひはしちひす  
す」

「わかつたわ  
」  
「りょーかい  
」

それから民たちに話を聞いた

この町のはずれでモンスターたちが町を襲っている

今まで何ともなかったがこう言ったことが多発していると

勿論民たちにはこうつたえた

- ・ 「午後から私が探査に向かいその場で伐採をするから安心して」と
- ・

なんか少し長引いちゃった

いそいでシャワーを浴び服を戦闘服に着替え武器も装備してから客間へと向かった

「いそいで少し長引いちゃった」

「ああ気にしてないよ」

「罪に就いたんだよね」

「.....」

「いや・・・意外と軽装してるとかつこいいなあ」と思って

「えっ？」

でも言われてみればそうかもしれない

下着の上に薄いTシャツ軽い胸など急所を守るための甲冑

下は、動きやすいようにパンツスタイルで膝まで来るブーツと

腰についた刀と鎖で決めている

「よかったらおひる一緒に食べない？」

「いっしょの？」



「もちろん」

「ならお言葉に甘えて」

お昼の時間は何かと大変だった

悠里はお兄様に気に入られて妻にならないかと言われているし

理欧は理欧でほったらかしになってるし

相変わらず父は私にばかりかまってくる

いいかげんつかれた……

「よしじゃあ行くか」

「はっ  
い」

「香菜くれぐれも無理はするないね」

「さっ」

「そういえばみんなギルドカードのランクいくつ?」

「えっと私はBだね」

「俺はとと……ええっと俺もBランクになってる」

「香菜あんたは？」

「.....」  
「スッ」

「ええ〜〜Sランク!? マジです!」いじゃん  
「

この後ギアアギアアいつていて出発が遅れたのは

まぎれもない事実である

第十二話 「探検と伐採」

なんだかんだとごちゃごちゃしたせいで1時間も

予定がずれたし

「もうこれ以上遅れるわけにはいかないから早く行こ」

「そつだね、なんだかんだ行って1時間くらいたったしね」

「くらいじゃなくて1時間だし？」

「て言っかこんなこと言ってないで早く行いっね」

やっと城から出た3人だった



「町の感じはあまり変わってないね」

「うんそれは思った」

町の感じはゲームと同じだった

変っていたのは、自分たちのキャラクターの地位や境遇だけであり特に変化はなかった

「ちょっとそこのお店よって行かない？」

武器や防具の専門店だからちょっと見てみない？」

「じゃあちょっとのぞいてみるか」

カランカラン

「いらっしゃい・・・っ失礼しました

今の言葉遣いをどうかお許してください」

「ねえあなたはここのお店主人？」

「はい……そうです……」

「私はそう言った上の人だからといってそういう言葉使いをされるのが嫌いな」

私は偶然王家に生まれただけ、あなたと同じ人間で庶民なの

特別扱いが嫌いだからそのへんだけよろしく

敬語を使ったら怒るからね」「ニコッ

「わかりました今日はどうなさいました？」

「ちょっと町を見に来たのと、ついでにちょっと見に来ただけかな  
それよりオススメある？」

「はい、いまこの店の中では「さらが」がお勧めです  
なぜかと……」

結局何も買わなかったが

いろいろと武器が見れたからよかったかな（笑）

「まちはかなり繁盛してるね」

「それは思ったけどさっきから声を掛けられてばっかで

全然進んでないじゃん」

「別にいいの・・・市民との交流は必要よ」

とか話しているうちに町はずれまで着いた

そこにあっただのは衝撃的な風景だった・・・

「……わんぱう」

「……なごれ」



「マジかぁ……………」

想像していたより悲惨なものだった

村の人に聞き被害のひどい場所へ行ってみると

そこはもう農場というより荒野へと変貌していたのである

「ねえ悠里……これは何かわかる?」

「さあゲームの世界では見たことないわ」

「理欧は？」

「俺もないね」

「なんだろう・・・村の人によれば夜があやしいらしいから宿を借りて、夜に交代制で見張ってみるか」

そういう事で決まったので夜まで宿で休むことに決定

「じゃあこの世界は？」

「うーんどおって聞かれても

実感がどうしてもわからないのよね」

「俺も実感がないかな」

「やっぱりそんなもんだよね私も最初はそうだったもん

特に急にこの世界へと連れてこられた時は

何言ってるのこの人？これは私の夢じゃないのって思ったし」

「最初は夢だっと思ってけど二三次来てると

現実なんだあ〜ってあらためて思うと思うよマジで」「

「そろそろ時間も時間だしまずは俺から行くよ

夜だから悠里と香菜は二人で行けよ

いくら強いからって言っても女なんだからな自覚しろよ？」

「ハイハイわかりましたよ」

「ん・・・じゃあ行ってくる」

ボタン

「そういえばこの前神様に会ってきたじゃない？」

「しつあつてきたけど」

「香菜はいつかは男に戻れるのかな？・・・なんて思って」



「ふんふん」

「どうしてって……あ、あなたのことが好きだからよ」「カー」

「……………」  
「カー」

「なんとか言いなさいよ」  
「お」

「わたしは……いやおれもお前が好きだ……」

いつも一緒にいたけど実はずーっと好きだった

悠里との約束も忘れてないぞ・・俺は悠里と結婚がしたい

だから俺は神様に対してこんなに怒っているんだ

女のまんまじゃ結婚できないしな」

「なんだ、忘れてなかったんだ・・さすが恭平だね」

「久しぶりにその名前で呼ばれたなあ」

あといい忘れてたけど元の世界では男にも戻れるらしい」

「そうなの？・・・じゃあさっそく帰ったら男に戻って

デートしてよね？」

「了解」

(おい悠里と香菜聞こえるか?)

「あれ理欧どこから話してるんだ?」

（魔法以外の何があるんだよ？

今嵐の犯人と思われる魔物が出てるから早く来い）

「リョ かいです」

(あと恭平・・・恋が実ってよかったな)

「お前後でぶっ殺す?」「ニクッ

「悠里い、例の犯人が出たらしいから行くぞ」

「わかった」

「おい香菜に悠里こつちだ」



「ちょっと遅れたすまない」

「別にかまわんがあれだ」

「なんだゴブリンじゃん

あんなの剣と魔法で一撃だって」タタッ

スパッ シュシュッ

「はい……」

「ホラ終わった」

キイ~~~~~

ギヤ~~~~~

「さすがS級ランクだな」

「はやく宿で眠ろつぜ、あすは来た道に戻るわけだから  
その前にこのままいったん元の世界へ戻ろつぜ」

「ねえ香葉戻るときはどじじするの？」

「別に行きみたいに意識を元の世界に集中させれば帰れるよ」

「  
リヨ  
かい  
」

「  
香菜約束だからね  
」

「だからわかってるっつーのまた明日」

「っつして初めての伐採はあっけないものだった

### 第十三話 「約束のデート」

元の世界へ戻った私たちは、そのまま眠りについた

次の日、私は体が本当に男に戻るのか試してみた

「えっと神様が言うには、男になれと意識をすれば戻るらしい」

（男になれ？）

ボンッ



「おっなんか変化したな・・・鏡を見てみるか

ヨッシャー男に戻ってる」

悠里に電話しようかな

「もしもし悠里」

「何？その声からしてもしかして男に戻れた？」

「うん？だから約束通りデートをしよう」

「じゃあ、ここで待たせておいてよ。」

「俺が家に迎えに行くから待っててよ。」

「うん、わかった、待ってる。」

えつと確か悠里は今も俺の実家の隣に住んでたはずだから

30分くらい電車に乗れば着くかな？

「やっぱり男の姿はいいね

痴漢やナンパ、ストーカーや変な視線もないし

ゆっくりといすに座って行くことが出来る」

だけど俺は……いや私は、戸籍を女にしたし

しかも学校には転校生で女として通っているから

普段は女として生きないといけないのだ

「まあそんなことは忘れて今日は思いっきり楽しむぞ」

「恭平だよ」

「はい……どちら様ですか？」

ピンポン

「あっ？恭平・・・ちょっと待っててまだ準備中」

「りょーかい」

やっぱりデートだからしっぴかり決めてきたけど

悠里はどんな格好をしてくるだろう？

俺が女体化した時の服も悠里の選んだ奴だったし

最初は恥ずかしかったけど・・・結構かわいかったし

「おまたせ~~~~~?」



「ど、どおかな？」  
カー

「？」  
？」  
？」  
？」

「か……かわいい……」  
「カー」

「ほ、ほんとう？……よかった……この服私が恭平と

いつかデートをするときになって思って買っておいたの

こんなに早く着れる時が来るとは思わなかったけど（笑）」

今日の悠里は、もう17年間お隣で幼馴染をやってる中で

一番かわいかった……

破壊力がハンパなかった……マジでやばい興奮する

「じゃっ……行っっか」

「で今日はどこに行くの？」

「あ、おう・・・行くところか」

覗き込むな興奮するだろ

「ねえ恭平い」

「あつごごめん・・・特に決まってるないんだ

悠里の行きたいところに連れて行くつもりで……

ちょっと遠いところでもいいよお金は余裕があるから

「じゅん……じゃあ、SCARY WORLDに行きたい」

「おおそこか、じゃあ行くか」

SCARY WORLDとかいう名前だから怖くないかと思いきや

今では日本一怖い遊園地として有名だ？

絶叫マシンの数とその中のマシンの総延長と高さがギネスに載っている

基本的にここは、ジェットコースターで絶叫がお化け屋敷で絶叫しかない

ちょっと悠里にくつつくチャンスかもww

「おい悠里・・・チケット買うから少し待ってて」

「うんわかった」

「はい・・・これ、乗り放題だから今日は乗りまくるぞ??」



「おお~~~~~」

「ねえ恭平……ここは軽いから順番にのろ  
そうしないと他のが怖くなっちゃうから……」

「やっぱりそうだよな・・・そういえば俺最近

三半規管がおかしくなったか知らないけど、

絶叫マシンが全然怖くなくて困ってるんだよね」

「マジっ?」

「本<sup>マジ</sup>気です」

「じゃあ半分くらい絶叫マシンに乗ったら、お昼にして

それからお化け屋敷に入ってから絶叫マシンを乗るのを再開しよ?」

「うん、そんな感じがいいかなって俺も思ってたんだ」

「じゃあ恭ちゃんといっしょだね」「ニ」

「恭ちゃん？」

「いやあ・・・あの・・・恭平だといつも通りだから

こっちのほうか恋人っぽいしそれにあんたが理欧とつるみ出すまで  
こっちやって呼んでたじゃんわたし・・・だからこっちのほうがいい  
なあって思って」

「そついえばそつだったな・・・懐かしい

恭ちゃんって呼ばれなくなって8年くらいたつのか・・・

おつと順番が来たぞ・・・一番後ろかやったな？」

「ええー前がいいじゃん」

「わかってないな・・・一番後ろは佐kを登り切る前に速度が出るんだ

だから上に向かって放り出されそうになるから尻が浮いて怖いのか？

だから後ろがいいのか？」

「そう言われてみればそうかもね」

「しかも下も見えないから余計怖いみたいだね」



3分後

「案外怖くないな」

「そーだね」

そうしていろいろと乗った

時間がたつのはすぐくはやくてもうお昼になった

「今日はお弁当を作ってきたの」

「マジで??悠里の手料理なんて初めてじゃないか?」

「そりゃあ今まで練習してきたからね

今日みたいな日のために・・・」

「そうか・・・ありがとな

本当はもっと早く告白をするつもりでいたけど

俺がへっぴり腰なせいで結局悠里から告白されちゃったもんな」

「本当よ、私なんかいつ告白されるか楽しみに待ってたのに

あんたのへっぴり腰のせいで台無しよ」

「でも悠里は良く学校の男どもに告られてたって」

「そんなのあんたが好きだから断ってるにきまつてるじゃん」

「そうかそうだったのか」「ニヤニヤ

「何キモい笑みを見せてるんだよ」

「いやー新ためて言われると照れるなーって」

「あっ」「カー」

うわーあそこのカップルアツアツ

若いわねえー

「しつわつ 恥ずかしー」

「お化け屋敷に逃げ込むぞ」



「さっ」

タッタッタッ

「っっていうか、ちょっとずついてて良かったね」

「いきなりこんなトラップとは・・・びっくりさせやがって」

「..?」

「..?」

「お化けやしきなんだから仕方ないでしょ??」

「まあそうだよな・・・ウオツ・・・イテツ」

「ハツハツハ・・やばっマジつけるｗｗｗｗ」

驚いて頭ぶつけるとかｗｗｗｗ」

「早く行かないと置いていくよ」

俺はかなり驚いた

そして一日が過ぎ帰り道

「絶叫マシンより怖かったじゃねえかお化け屋敷のほづが」

「もうほんとにおもしろかったわ」

いきなりウオツ・・・イテッだってWWWWWWWW  
「

「おっとまじ家か」

「まじこまじのまじ」

「うん今日はありがと・・・」

また連れて行ってよね「グート」に

・ 「わかってるって、明日からはまた香菜に戻らなきゃいけないけど・・・」

今度は、女の俺と一緒に服を買いに行こう

まだ服のセンスがないから一緒に選んでほしいし」

「うんわかった・・・とびっきりかわいい服を選んであげる」

「じゃあまた明日ね」



「うんじゃあね」

「ううして今日のデートは終わった」

「今日の悠里かわいかったな」「ニタニタ」

第十三話 「約束のデート」(後書き)

恭平「久しぶりに男に戻ったと思ったら、なんか変態チックになってるじゃん」

作者「でもそういう行動をしてたんだから仕方ないんじゃない」

悠里さんもそう思いますよね?」

悠里「私もこれは少しキモいと思う・・・とくに最後」

恭平「……………」ガーン

作者「まあ次はどんな話にしようかな?」

悠里「まずは日常に異世界のアイリスやイーリスが出てきても面白いんじゃない」

作者「じゃあそうしましょう」

次回 なぜか恭平のクラスにアイリスとイーリスが? です」

「あれっ!?!夢は覚めたんだよね?」

今日からまた女かよ

なんか早とちりをしてしまったせいで普段は女でいないといけな  
いと言った

面倒なことに……

「おっはよー今日から香菜だね?」

相変わらずテンションが高い悠里……

「よう相変わらず元気だな」

「なんかテンション低いねどうしちゃったの？」

「いやーさあ・・・また女に戻るのかあーみたいだな」

「なんで・・・私は恭平でも香菜でもどっちも好きだから気にしな  
いよ」

「でもなやっぱり堂々と学校のマドンナと俺がカップルだって  
見せつけたかったなあーって・・・」

「ふうん・・・でもまあまあですかね」

「なんじ？」

「ホラだって今、学校でも雑誌でも1位の香菜と2位の悠里が  
百合ってしまったら私が1位のマドンナと付き合ってるって言える  
じゃん」

「それじゃあ逆だし・・・」

先ほど悠里が言っていたように私はモデル投票で1位になったのだ

ちなみに悠里は12位だった・

最近は声をかけられすぎて困ったいるのだ

特にこの外人顔に身長じゃすぐ見つかるのだ

「ほらほらそんな顔していないで早く行くよ」



「お、おうそうーだな」

学校についてもかなと悠里に安息はないのだ

ついたとたんこれだから困る

「香菜さん雑誌見たよ」

「1位すごいね」

「悠里さんもすごいわ」 「ペアの場合は二人が1位だね」

「どっしたらこんな化粧うまくなるの？」

朝から疲れるわあ~~~~~

ガラガラ

「ハイ皆さんあまり香菜さんと悠里さんに質問ばかりしていると

二人が参っちゃうわよ

それにみんな早く席に着かないなら・・・

転校して来た女の子二人、他のクラスに回しちゃうわよ（笑）

ガタガタ      ガラ      ギイー

全員着席

「じゃあまずSTを始めるわね

今日は、特に特別なことはありません？

という事で転校生を紹介しちゃいましょう・・・入ってきて」



シーン

「おい香菜知ってるのか？」  
「？」

「前にいらしたところの友達とか

「さすが香菜の友達美人だな」  
「タツ」  
「バシッゲシッ」

「やばい3人まとめて・・・イ

「ええーと香菜さんの反応通り、この二人は香菜さんとは面識がありません

だけどもなさんとは始めましてなので自己紹介をしてもらいましょう」

「ええーと私は・・・アイリスだ、アイリス・ブライトマン

あまり日本には慣れてはいないが一応は日本語学校で日本語は習得済みだから

みんな私のことはアイリスかアリスって呼んでね」ニコ

「えっと私は・イレーナ・アイシス・リベラって申します

私のことはイレーナって呼んでください」

「じゃあ二人とも香菜さんと面識があるという事だから

学校のことは香菜さんに聞いてください

席は特別に香菜さんの隣と悠里さん隣にしたのでよろしくね」



「という事で今日の6時間目のホームルームはロングタイムという事で

クラスの交流を深めるために時間をとりましたのでお楽しみに」

何をするのか？

静かにしていたいよ

「香菜様あ  
」

「えっかなさま  
」

「おいおい聞いたか香菜さまだって  
」

むわむわ

「ちよっ？ アイリスここで香菜さま禁止」耳打ち

「もも申し訳ありませんでした」「ペ」リ

「気をつけてねってそれよりなんであんな達がいるのよ？」

「それは・・・あのお〜」

「私が来たいと言ったのよ」

「イレーナが……どうして」

「実は自分が作った世界へは行ったことがないので  
香菜さんが普段はどうしているのか気になったので」

「なんでもしょうか、おれは」

「ねえねえアイリス」

「相変わらず」の世界でもマゾなの「耳打ち中

「ハイあれのは困ったもいんですよ」

「まあいいわ、2時間目の後に大きな休憩があるから

その時に校舎を案内するわ」

「たすかります」



そしてつまらなすぎる数学と英語を受けた後

学校を案内に出た

なぜかさつきから視線が痛い

それになにかしらと道が開けていくし

「っておいアイリス変な魔法使うな？」

「こっちの世界では魔法は本か映画かアニメの中だけで

実在しないと思われているから駄目だ」

「しめんなさい・知りませんでした」シヨボーン

「わかればいいの」ナデナデ

「うふーー気持ちナ」

本当になでられるのが好きなんだなアイリスは

なんかイレーナも微笑ましそうに見てるし

「ちょっと香菜あ、早く案内しないと回りきれないよ」

「おっとそうだった急ごう急ごう」

こうして校内を回り終えた4人だったが

この後アイリス、イレーナ、香菜、悠里の4人がなぜか勝手に新しく作られた文化祭の出し物の

生徒投票しきで抜擢された生徒は強制参加という理不尽なものに

応募される羽目になるのはまた別の話である

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2639y/>

---

なんでこんなことになった？

2011年12月24日05時47分発行